

今年度第1回目となる外国語活動・外国語の研究授業を 深谷 久美 教諭が行いました。新型コロナウイルス感染症対策のため体育館で行いました。協議会では、やり取りの活動における中間指導や新出表現等について活発な意見交流を行いました。

研究主題

関わり合い、学びを広げ、深める児童の育成

～思いを豊かに表現できる授業づくりを通して～

授業者:6年1組 担任 深谷 久美 教諭

単元名:NEW HORIZON Elementary English Course 6 Unit 3 Let's go to Italy. 自分の行きたい国を伝えよう。

指導講評:文部科学省初等中等教育局視学官 直山 木綿子 先生より



〈研究経過報告〉

① スモールトークの充実

スモールトークは、既習事項を使って、会話を続けることを目標に行っている。しかし、児童同士のスモールトークは、まだ行っている回数が少なく、会話を続けるのはなかなか難しい。会話を続けるのに便利なフレーズを少しずつ児童に気付かせ、会話の幅を広げたり、自分が聞きたいことが聞けたりするように工夫をした。

② エンドプロダクトの提示 言語活動

単元の初めにエンドプロダクトを提示し、どんな力を付けたいか児童が見通しをもてるようにした。今単元では、児童が旅行会社の社員になりきり、おすすめの国をプレゼンテーションすることをエンドプロダクトとした。児童はプレゼンテーションすることを楽しみにし、そのために、英語でおすすめの場所や食べ物を言えるようになりたいと考え、意欲を持続させることができると考えた。

③ 児童が世界に興味をもつための工夫

校内の教員に予め、どこの国に行きたいのかインタビューし、動画を作成した。身近な教員が世界のどんな場所に興味があるのか、児童は関心をもって動画を見ると考えた。また、教員が繰り返し使う表現を児童が聞く機会とする。さらに、世界の国々に興味がある児童、あまり興味がない児童がいるので、世界の国々を知るきっかけとしたい。

④ 総合的な学習の時間との連携

総合的な学習の時間を使って、自分の行きたい国調べを行い、児童が本当に行きたい国を英語で表現できるようにする。国調べをすることで、さらに世界の国々に興味をもち、伝えたいという思いが膨らむと考えた。

⑤ スターティングアウト(教科書の動画)の活用の仕方の工夫

今まで単元の最初に、単元の内容に合った音声を聞いて、おおよその内容をつかむという流れで授業を行ってきた。しかし、単元によっては、児童が聞き取れることが少なく消化不良になっていると感じていた。そこで、今単元では、スターティングアウトの活用の場面を2つに分け、1つは従来通り単元の初めに、もう1つは、単元の後半で動画を見る活動を取り入れ、児童が「聞き取れた・わかった」という思いを味わえるようにしたいと考えた。また、後半では、5つの動画を視聴し、その中から自分が行きたい国を選び、その理由をワークシートに記入し、思考・判断・表現の観点で記録に残す評価場面とする。

〈授業者自評〉

- ・今単元では、児童に外国に興味をもたせることが重要だと考え、総合的な学習の時間と連動し、行きたい国を調べたり、朝の会のスピーチテーマを「行ってみたい所はどこ?」にするなど、児童が外国に興味をもてるようにした。
- ・知っている単語や知識を使って伝えようとしており、ので成長を感じた一方で、“What can you eat in ~?”を言えずに困っている児童がいたのでもう少し丁寧に指導しても良かった。
- ・教室なら聞こえる「つぶやき」が、体育館だと聞こえなかった。中間指導中にあまり「つぶやき」を聞き取ることができず残念だった。

〈研究協議〉

協議の視点① 児童が言いたいことを言えるようにするために、中間指導は有効に行っていたか。

協議の視点② 児童は、話したり、聞いたりする活動からスムーズに書く活動に移行することができていたか。

【低学年】

視点① 児童が言えるようになるために、指導者のデモンストレーションや歌が充実していたので、児童の言いたいことや伝えたい気持ちが高まっていた。中間指導では、わからないことをそのままにせず、ちゃんと質問する児童がいた。

視点② 話したり、聞いたりする活動はできていたが、書く活動になってしまうと手が止まる児童が増えていた。

→総合的な学習の時間で調べている国を書けばいいのか、プリントに書かれている国を書けばいいのかで悩んでいた。この活動は日本語で伝えても良かったと思う。

【中学年】

視点① わからないことを言える雰囲気作りがしっかりできているので中間指導も充実していた。

質問 授業の最後に「Sounds and Letters」をやったことで授業の流れが変わってしまった。「Sounds and Letters」は最初でもいいのではないか。

→「Sounds and Letters」は、中学校に向けて、「音と文字の関係」への気付きや慣れ親しみを図るために取り入れている。確かに最後にやることで授業の流れが変わってしまったので、今後改善していく。

【特別支援】

視点① 中間指導はとても有効だった。ペア活動→中間指導①→ペア活動→中間指導②の流れは良かったが、少し時間がかかり過ぎたと感じた。

視点② 中間指導が充実していたので、書く活動の時間があまり取れていなかった。また、書く活動の後に「Sounds and Letters」もあるので、時間的余裕がなかった。

→中間指導で様々な質問が出てくると、その対応に時間がかかってしまう。また、中間指導はどんな質問が出てくるかわからないので予測が立てにくい。

【高学年】

視点① 中間指導で出てきた質問を児童同士で解決し合っていることは凄いと思う。

質問 なぜ「You can eat ～」なのか。なぜ「I can eat ～」ではないのか。

→エンドプロダクトが「旅行会社になりきっておすすめの国を紹介」をするので結び付けるために、you をあえて使った。

〈指導・講評：文部科学省初等中等教育局視学官 直山 木綿子 先生〉

教室環境の整備

・教室環境を整えることで、「児童が変わる」「授業が変わる」。

・チーム涪江として全職員で教室環境を整えることを意識したことで「教室が変わった」「児童が変わった」「授業が変わった」。

学級経営が基本

・ひとつのことを軸にして指導改善していくことで他教科等に派生する。学級経営が基本である。

・外国語の授業はコミュニケーションの時間であるため、コミュニケーションが取れる児童と指導者、児童同士の関係が大切である。

・分からないことを「分からない」と言える学級にすることが大事である。児童は指導者からも、児童同士からも学ぶ。

・友達の失敗や間違いを笑うことはあってはならない。

言語活動について

・言語活動とは、「実際に英語を使用して互いの考えや気持ちを伝え合う」活動である。

・今回の授業は45分中少なくとも24分間が言語活動になっており、凄いと感じた。児童がビデオを視聴し、内容を理解している間も言語活動である。

質問：新出表現が出たときの指導について。

・まず、児童には「外国語の習得には時間がかかる」ことを理解させる。

・外国語は間違いながら身に付ける。だから、繰り返し聞いたり、言ったりすることが大切である。

・新出表現が出たときは、指導者同士のやり取りを聞かせて、「まず先にやらせてみる」そこでしっかりと聞いている児童は指導者同士のやり取りを見ているだけで、ある程度できるようになる。

・伝えたいことが言える児童と言えない児童で学び合いをさせることが重要である。言えない児童は、次はしっかりと聞こうとする態度が育つ。

・初めから教えない。聞きたいと思わなければ、児童は聞かない。

質問 中間指導の指導方法について

・分からない児童は何が分からないか分かっていない。そのため、分からないことを明確にすることが中間指導である。

・分からないことを分かるというメタ認知を鍛える。最初から教えてしまうとメタ認知が働かない。

・言いたいけれどうまく言えないことは、既習事項を使えばどう表現できるかを学級みんなで考えるようにする。一人の分からない、質問、疑問を、みんなで解決する。そうすることで、互いに学び合える。

・すぐに教えるのではなく、分からないことを掘り下げて、イメージさせて、知っている言葉からヒントを見つけさせる。

・6年生になれば、今日学習したこと、聞いたこと、言ったことの一文を書き写させるとよい。

・聞いたり言ったりしたことを書かせることで、音声を視覚化させていく。